

バスク語レクンベリ方言の絶対格とゼロ

石塚政行

キーワード: バスク語、レクンベリ方言、名詞句、等位接続、絶対格、ゼロ

要旨

バスク語には名詞句に後接して格を標示する標識があるが、無標識の名詞句も用いられる。この無標識名詞句が絶対格という格を持ち、それはゼロで表示されているということを主張する。ゼロとは「何も標識が無いことによって何らかの意味が表されている」ということであり、義務的なカテゴリーに現れると考える。レクンベリ方言では、無標識名詞句と能格名詞句の機能が一部重なっているため、機能面からは無標識名詞句が独自の格を持っているかどうかは決定しがたい。しかし、名詞句 (NP) の等位接続において格の無い NP の接続が許されないことから、無標識名詞句にも格があると考えるべきである。従って、格は義務的なカテゴリーであり、無標識 NP はゼロで表される絶対格を持つ。

1. ゼロについて

この研究ノートは、「そこに『ゼロ』はあるのか？」というワークショップ¹での発表をもとにして書かれた。この問いには、そもそも『ゼロ』とは何か」という前提が共有されていなければ答えられない。

そこでまずは「ゼロ」である。言語学用語辞典を引くと、ゼロは「物理的な実現形を持たない抽象的な単位」のことで定義されている。例えばこんな具合である。

null element [...] An element which, in some particular description, is posited as existing at a certain point in a structure even though there is no overt phonetic material present to represent it.

Trask (1992: 191)

zero [...] A term used in some areas of LINGUISTICS to refer to an abstract unit, postulated by an analysis, but which has no physical realization in the stream of speech.

Crystal (2011: zero²)

「物理的な実現形を持たない抽象的な」は良いのだが、「単位」だと考えたのがまずかったのではないかと私は思っている。「単位」だと考えるから「特定の分析・記述における」などという余分な留保が必要になるし、「どのような単位にならゼロを認めていいのか？」という議論も生まれるのである。この議論における立場の一つには「ゼロは有形の形態素の異形態に限定されるべきだ」というものがある。例えば『言語学大辞典』は、「ゼロが唯一の異形態であるよう

¹ 2012年3月22日に東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所で催された。

² Crystal (2011) にはページが付いていないので項目名を記した。

な形態素を仮定することは避けるべきである」「無意味である」という（亀井他編 1996: 840）。Bybee (1985: 52) がゼロの好個の例として「英語の名詞単数形を示すゼロ」を挙げているのを知っている私は、『大辞典』の記述を読んで困惑するのである。英語の名詞単数形はどう考えても何かの異形態とは言えない。この二者はどうして真逆の立場に立っているのだろう。

1.1. ゼロを異形態に限る必要はない

ゼロを抽象的な単位として捉える見方は、英語の *sheep* の複数形に関する以下の分析に端的に現れている。

[...] *sheep* のようなごく一部の名詞だけ、複数形をつくる形態素が付加しないと考えるのは不自然です。そこで、*sheep* のような単数形と複数形が同じ形の名詞の場合、複数形には目に見えない形態素が付加していると考えられます。

佐久間他 (2004: 60)

この分析は、複数接尾辞が {s} や {z} の他に { \emptyset } という単位を異形態として持っていると考えて、「英語の複数形名詞は語幹+複数接尾辞から成り立つ」という一般化を守ろうとする。Gleason (1961) はこのようなゼロ異形態は支持するが、ゼロを唯一の形態とするような形態素は認めない。この種の人たちは、そのことによってゼロがとめどなく増えるのを憂慮するのである。

The other possible use of the zero concept in morphology would be to set up a \emptyset morpheme, that is, one in which there is no overt allomorph whatever. [...] If we are to make such free use of zero, there is no definable place to stop.

Gleason (1961: 76)

ゼロはその本性からして物理的に知覚できる形を持たないから、容易には観察できない。Gleason はそれによるゼロの際限ない増殖を危惧している。ゼロの使用を異形態に制限しておけば有形の形態素が現れるところにならばゼロを設定できないから安心だが、ゼロ形態素を容認してしまえば、どのようなゼロが認められどのようなゼロが否まれるのかという厄介な問題が発生するということである。

しかし実際のところ、ゼロ形態素を認めたからといって私達がどこかまわらずゼロを設定するかどうか、私は懐疑的である。というのはこんな話を聞いたからである。

「箱の専門店」というものがあるとする。大きささま色とりどりの箱が陳列されている。大量生産のチープなものから手間ひまの掛かった超高級品まであるけれども、この店で売っているのはただの「箱」である。

また一方では、リボンのかかった箱が贈られてきたとする。その箱を受け取って、贈り物への期待に少しときめきながらリボンを解くが、蓋を開けると何も入っていない。この箱は「箱の専門店」に並んでいるものと実質的には同じはずである。しかし、プレゼントとして贈られて来たこの箱はただの「箱」であることをやめて、「何も入っていない箱」、つまり「ゼロを有

する箱」になっていないだろうか。この時、箱に「ゼロ」をもたらしたのは、「プレゼントとして贈られてきた箱の中には何かが入っているはずだ」という受領者の信念である。

これは私の友人の学僧が禪家のいう空^{くう}について説明してくれたときの話である。その詳細はともかく、ゼロを設定するというのは正にこういうことではないだろうか。私達はどこにでも手当たり次第にゼロを見出したりはしないのであって、「何かが存在するはず」という期待があって初めて、何も無いそこにゼロを発見するのである。

それでは何時いかなる時に私達は期待してしまうのか？ 答えは「かくかくのものは、しかじかの要素から成り立っている」と思っている時である。上の例でいえば、『贈り物』というものは、『包み』および『中身』から成り立っている」という常識があるから、「中身がゼロである」が認識される。『商品』というものは、別に『包み』と『中身』から成り立っているものでもない」であればこそ、「箱の専門店の箱」は「中身が無い」にはならず「ただの箱」なのである。

これを言語学的に述べ直すと、例えば Dixon (2009) がゼロを「何も無いこと (nothing)」と対比して次のように定義している。

[...] a distinction should be made between: (a) zero, referring to an empty (and blank) slot in grammar (this to be shown by “∅”); and (b) nothing, the absence of anything (this to be shown by a space, or by “{nothing}”).
Dixon (2009: 126)

Dixon の「文法上のスロット (slot in grammar)」というのは私達の言葉でいえば「かくかく」というものを構成するしかじかの要素」である。換言すれば「使用者に選択を要求する範列的關係にある記号の集合 (から抽象された単位)」でもある。

Bybee (2010) も「英語における名詞の数」を引いて次のように述べている。

A zero morpheme expresses meaning but has no overt marker. [...] A zero morpheme is always just one member of a grammatical category; the other member have to have an overt marker. [...] Zeroes can only occur in grammatical categories that are obligatory.
Bybee (2010: 177)

正に、英語において「名詞という語の意味機能は語幹の表す意味と数を表す要素から構成される」は例外なく成り立っている。不可算名詞の場合には選択肢が一つしか無いが、可算名詞なら単数か複数かを選ばなければ名詞を使えない。そして一般的な名詞単数形と複数形を比べると、単数形においては数そのものを示していると考えられる形式が何も知覚できない。これがつまり、「単数形では数の要素がゼロである」になる。一方で、単数形を表す形態というのは、無い。

こう考えると Gleason に代表される不安は杞憂に過ぎず、ゼロは何かの異形態に限られるべきものでもないということが分かる。Gleason が「ある形態素に包摂される異形態の一つ」という形で築いたゼロの氾濫に対する防波堤の役割は、「あるパラダイムに属する実現形の一つ」という縛りによっても担われ得るからであり、結局のところ私達は「そういうところ」にしか

ゼロを見出さないからだ。すると、問題は「パラダイムを形成するとはどういうことか？」というところに繰り上がるのである。

1.2. それをゼロ形態素と考えることはない

しかし、Gleason たちは何だっけこうは考えなかったのだろうか？ それは恐らく、「単数を示す『ゼロ形態素』を認めてしまうと不都合があるから」だろう。「データを精査してもゼロの分布なんて決定できない」(Matthews 1974: 117) とか「目に見えない要素が接頭辞か接尾辞かどうして分かる？」(Booij 2007: 39) という意見はあって、なるほど同じパラダイムを構成する形態素が全て同じ位置に付いているという保証は無い。

一方で複数接尾辞におけるゼロ異形態だっけ、ある特定の分析でしか有効でない仮構物である。例えば、この分析によって得られる「記述の簡潔さ」という効用は、「なぜ記述が簡潔でなければならないのか？ どこまで簡潔にする必要があるのか？」という問いの前には万能ではないということだっけである。

それでもなお、「数の標識が付加されない多くの名詞は単数を表す」や「*sheep* は何も付かないままで複数を表す」という言明は、どのような分析においても果たされなければならないだろう。だったら、ゼロの議論はまずこのレベルでしたら良いじゃないかというのである。つまり、「ゼロ形態」とか「ゼロ形態素」という言い方はひとまず措いて、「英語の名詞のパラダイムにおいてゼロは単数を表す」あるいは「*sheep* や *fish* のパラダイムにおいてゼロは単数も複数も表す」といった主張を最初のステップとするのである。

このゼロが他の形態素と同じような形で存在しているものなのか、それとも別の表示の仕方が求められるのかは、その後の問題である。意味を担う単位が「形態素」という在り方で表示されなければならないというルールがあるわけではないのだ。それは、Adger (2003: 29) のように、未指定の数素性には単数の値を代入するという規則で表示してもよいかもしれないし、Booij (2010: 255f.) のように一つひとつの語形をもとにして、「単数形構文」として表示することもできるかもしれない。

ということは、「そこに『ゼロ』はあるのか？」という問いは、「それは形のある標識を持たないことによってパラダイムの一角を占めているのか？」ということと「占めているとして、そのことはどのように表現されるべきか？」ということの二つに分ける必要があるということである。これがつまり、ゼロを最初から何らかの「単位」と考えていては議論にならないと思う理由である。「ゼロ」がいかなる方式で表示されるかは一端棚上げにして、「それはゼロと呼ぶのにふさわしいものなのか？」という点を論じることでしか、共通の前提を作ることはできないのではないだろうか。

2. バスク語の名詞句とゼロ

そこで、バスク語レクンベリ方言³における無標識の名詞句はゼロによって何かを表している

³ バスク語はピレネー山脈西部で話されており、5～6の方言に分けられる (GB: 4, Zuazo 2008: 3)。

と言えるようなものなのかを考えてみたい。すなわち、「バスク語の無標識の名詞句はパラダイムの一員なのか？」である。

バスク語の典型的な他動詞文では、被動者項 (P) が無標識の名詞句で表され、動作主項 (A) には標識 *k* が付く。標識 *k* が付された名詞句の格を能格と言う。無標識の名詞句は他動詞の被動者項のほかには非対格自動詞の唯一項 (S_p) にも用いられる⁴。P と S_p は、定動詞の一致において同じ接頭辞が用いられる (1, 2) という点を考え合わせると、文法的に一つの単位を形成しているといえる。

(1)⁵ *ni hemen n-ago*
 1S(ABS) ここに 1SG-PRS.居る
 「私はここにいる」

(2) *xakurr=ek ni begiraten n-au-te*
 犬=PL.ERG 1S(ABS) 見る.IPFV 1S-PRS-3P
 「犬たちは私を見ている」

また、先行研究で指摘されている範囲では、無標識の名詞句は有音の格標識を持つ名詞句と同じ意味機能を文中で担うことはない。例えば、能格標識の付いた A と同様の振る舞いを無標識の名詞句が示すことはない。このことから、名詞句には格スロットがあり、P と S_p からなる文法的単位にはゼロで実現される格が付与されているのだと考えられる。この格のことを絶対格と呼んでいる (GB: 171f.; Rijk 2008: 31)。

しかし、レクンベリ方言では能格のみならず、絶対格と同じ形式の無標識の名詞句も A として用いることができる⁶。

(3) a. *haurr=a k xagarr=a jan du*
 子供=SG ERG 林檎=SG 食べる.PFV PRS
 b. *haurr=a xagarr=a jan du*
 子供=SG 林檎=SG 食べる.PFV PRS
 「子供が林檎を食べた」

本発表で扱うフランス・レクンベリで話されている方言は Zuazo (2008) の分類ではラプルディ＝ナファロア方言となる。一部の動詞を除いて、いわゆる定動詞は分詞と助動詞によってのみ構成される。定動詞は絶対格・能格・与格の項と一致する。

⁴ 非能格自動詞の唯一項には能格が用いられる方言が多い。フランス・バスク東部のスペロア方言では絶対格が使われる。

⁵ 例文は発表者がレクンベリで採取したもの。正書法に準じて表記する。母音は a i u e o の五つ、子音は [j], [ɲ], [s], 母音字間の [r], その他の [ʁ], x [ʃ], tʃ [tʃ], z [z] を除いて IPA に準じた音を表している。

⁶ 次の場合、無標識の名詞句が動作主項を表すことはできない：(a) 文法現象、一般的知識、文脈から動作主項が決定できない場合 (b) 動作主項が焦点になっている場合 (c) 動作主項が対比の対象になっている場合。

Aとして用いられる無標識の名詞句は、次のように能格項と同様の一致を示す。

- (4) a. *haurr=e k xagarr=a jan dute*
 子供=PL ERG 林檎=SG 食べる.PFV PRS
 b. *haurr=ak xagarr=a jan dute*
 子供=PL 林檎=SG 食べる.PFV PRS
 「子供たちが林檎を食べた」

つまり、レクンベリ方言の無標識の名詞句は、形態的には絶対格名詞句と同じだが、能格標識のある名詞句と同じ振る舞いを見せることがあるのだ。もしかして、レクンベリ方言の無標識の名詞句には格が指定されていないのだろうか。

例えば、英語の名詞単数形と比べた日本語の裸の名詞は「単数形」ではない。複数接尾辞「たち」はあるが、それが付いていない名詞が単数を表しているというわけではなく、ただ単に数が未指定なだけで、その名詞の指示対象は一つでもそうでなくてもよい。

そのような意味で格が未指定かどうかを考えるためには、「格」という範疇はどのような値を取り得るのかをはっきりさせなくてはならない。もし格が能格しかないのなら、レクンベリ方言の無標識の名詞句には格が未指定なのである。どちらにも使えるのだから、日本語の裸の名詞における数と同じことである。逆に、能格の他にも「格」と呼べるものがあるのなら、「能格以外の格標識の付いた名詞句とは依然として意味機能の差がある」という形で無標識の名詞句には格があると言える。そしてしかし、「能格以外にも格はあるのか？」という問いは実は微妙な問題でもある。

バスク語の名詞句は(5)のように定式化される(GB:113)。連体句には、連体節、属格名詞句、接尾辞-koによる連体詞が含まれる。限定詞には前置限定詞と後置限定詞があり、少なくともどちらか一つが要求される。レクンベリ方言では、前置限定詞には*bat*「一」を除く数量詞および疑問詞*zein*「どの」がある。後置限定詞は、単数標識*a*、複数標識*ak-e*、数詞*bat*「一」、不定複数標識*batzu*、および指示詞である。数詞のみが他の後置限定詞と共起することができる。

(6)は前置限定詞と後置限定詞の両方が用いられている例である。

- (5) 連体句 前置限定詞 名詞 形容詞 後置限定詞 (格)

- (6) *ikuxi dudan hiru artz handi =e ri*
 私が見た(連体) 三 熊 大きい =PL DAT
 「私が見たその3匹の大きい熊に」

格標識は名詞句の最後尾に位置し、直前の語とひとまとまりに発音される。(6)の例であれば*handieri*で一つの音韻的語を成すと考えられる。

「格」と呼ばれているものは、「名詞句が持つ意味的・統語的な関係を示す標識の体系」(Blake 2001: 1)と言われるが、そのうちでも能格や絶対格といったコアな格は、意味と言うよりは形態統語的な機能によって規定される概念である。それゆえ、数とは違って「格」という範疇に

含まれる値は何なのかを考えるためには、その形態統語論を見なければならない。

文法書で格と称されているものは、実際のところ形態論が2種類に分かれている。一つは能格や与格と同じく、名詞句の最後の語に付属して現れる。もう一つは場所を表す「格」で、(7b, c)のように、限定詞を伴う完全な名詞句には *ta* という形態を介さないと付属できない。

- (7) a. *mendi ra goazen*
 山 ALL 行こう
 「山へ (à la montagne) 行こう」
- b. *mendi =e ta ra goazen*
 山 =PL ta ALL 行こう
 「山へ (aux montagnes) 行こう」
- c. *zein mendi ta ra joan-en gira?*
 どの 山 ta ALL 行く-FUT PRS.A|P
 「どの山へ行こうか」

例 (7) のような場所格以外の「格」も、統語的性質によって二つに分けることができる。定動詞の一致に関わる能格・与格とそれ以外（属格や具格）である。更に、同じく定動詞の一致に関わるといっても、能格の一致は義務的であり、与格の一致は義務的でない。

かように「格」の持つ文法的性質は一様ではないが、絶対格と能格は上で述べた性質をすべて共有している。限定詞があるからといって *ta* が要求されることはないし、定動詞の一致に関わり、しかもその一致は義務的である。ということは、能格と絶対格の機能が重ならない限り、「絶対格」という格は能格と対立する形で存在していると胸を張って主張できるのである。

しかし、レクンベリ方言では無標識の名詞句と能格名詞句は一部で機能が重なるのである。すると、この無標識の名詞句は絶対格を持つものとして機能しているというためにはどうしたら良いのだろうか。

一つには、能格以外の名詞句を「格」範疇の値として認める、ということが考えられる。この場合、「格」は「名詞句の最後の語に後接して一体的に発音される種々の標識、およびそのどれも無いという標識」を値に持つ範疇として規定され、絶対格は、「S/A/Pを示す名詞句に用いられ、かつ能格以外の格標識の機能は持たない」という形で認めることができる。

もう一つ、「A/S_Aを示す無標識の名詞句」と「P/S_Pを示す無標識の名詞句」は違うものであり、少なくとも後者に関しては独自の機能を持つと言える、という考え方がありうる。ただ、これは以下に見る理由で支持しがたい。

というのは、「A/S_Aを示す無標識の名詞句」と「P/S_Pを示す無標識の名詞句」は一致の点では違う性質を示すが、再帰形の束縛の点ではA/S_A/S_PがPとは違う振り舞いをするからである。

一致においては、「P/S_Pを示す無標識の名詞句」は (1, 2) のように接頭辞が用いられる。一方で、「A/S_Aを示す無標識の名詞句」は (3, 4) のように接尾辞が一致を表す。

ところが、再帰所有形 *bere* 「自らの」を束縛できるのは同一節内ではA/S_A/S_Pに限られる。

- (8) a. *Manex bere emazti=a jo du*
 マネシュ(A) 自分の 妻=SG 殴る.PFV PRS
 「マネシュ_iは自分_iの妻を殴った」
- b. *Manex bere emazti=a ri mintzatu zako*
 マネシュ(S_p) 自分の 妻=SG DAT 話しかける.PFV PRS
 「マネシュ_iは自分_iの妻に話しかけた」
- c. **bere emazti=a Manex jo du*
 自分の 妻=SG マネシュ(P) 殴る.PFV PRS
 (マネシュ_iの妻がマネシュ_iを殴った)

このように、機能面からは無標識名詞句が独自の格を持っているかどうかは決定しがたい。

3. 名詞句の等位接続

そこで、名詞句の等位接続に見られる現象から格の義務性を検討する。等位接続詞には *eta* 「と」や *edo* 「または」などがあり (GB: 844ff.)、ここでは *eta* で代表させる。*eta* は (9-11) からわかるように語類によらず等位接続に用いることができる。*eta* で接続された要素全体に接辞を付加することはできない (11b)。

- (9) a. *xagarr=a hartu dut eta jan dut*
 林檎=SG 取る.PFV PRS.EIS eta 食べる.PFV PRS.EIS
- b. *xagarr=a [hartu eta jan] dut*
 林檎=SG 取る.PFV eta 食べる.PFV PRS.EIS
 「私は林檎を取って食べた」
- (10) a. *gure ardi =ak eta behi =ak ikuxten ditut*
 IPL.GEN 羊 =PL eta 牝牛 =PL 見る.IPFV PRS.EIS
- b. *gure [ardi eta behi] =ak ikuxten ditut*
 IPL.GEN 羊 eta 牝牛 =PL 見る.IPFV PRS.EIS
 「(私には) 私達の羊や牝牛たちが見える」
- (11) a. *bihar euri-tuko eta ximixta-tuko du*
 明日 雨-FUT eta 雷-FUT PRS
- b. **bihar [euri eta ximixta]-tuko du*
 明日 雨 eta 雷-FUT PRS
 「明日は雨が降り、雷が鳴るだろう」

なお、(10) は等位接続された前部要素の限定詞が省略されたものと解釈されるかもしれないが、(12) のように異なる意味を示す場合がある。このため、等位接続された名詞全体に限定詞が付いているものと考えられる。

- (12) a. *kantari =a eta dantzari =a daute*
 歌手 =SG eta ダンサー =SG いる.PRS.A3P
 「歌手とダンサーがいる」
- b. [*kantari eta dantzari =a dago*]
 歌手 eta ダンサー =SG いる.PRS.A3S
 「歌手でかつダンサーである人がいる」

有形の格標識の付加された名詞句の等位接続構造を見ると、バスク語諸方言で (13) のように一般化できる (GB: 844, 866ff., Rijk 2008: 490)。

- (13) a. $\sqrt{\text{NP+格}} \text{ eta NP+格}$
 b. $*[\text{NP eta NP}] + \text{格}^7$

つまり、格が標示された NP 同士を等位項とすることは可能だが (14a, 15a)、格の無い NP を等位接続したものに格標識を付与することはできない (14b, 15b)。

- (14) a. *artz =a k eta otxo =a k atakatu duzte haurr =ak*
 熊 =SG ERG eta 狼 =SG ERG 襲う.PFV PRS 子供 =PL
- b. $*[\text{artz =a eta otxo =a}] k atakatu duzte haurr =ak$
 熊 =SG eta 狼 =SG ERG 襲う.PFV PRS 子供 =PL
 「熊と狼が子供たちを襲った」

- (15) a. *semi =a ri eta alab =a ri opari horik eman ditut*
 息子 =SG DAT eta 娘 =SG DAT プレゼント それ.PL 与える.PFV PRS.EIS
- b. $*[\text{semi =a eta alab =a}] ri opari horik eman ditut$
 息子 =SG eta 娘 =SG DAT プレゼント それ.PL 与える.PFV PRS.EIS
 「私は息子と娘にそのプレゼントをあげた」

例 (10a) のような絶対格名詞句の等位接続構造は、(13a) と (13b) のどちらにも解釈できる。しかし、他の格の場合には (13b) が許されないのだから、(16) のように認可されていると考えるべきであろう。

- (16) [*ardi=ak*] (絶対格) eta [*behi=ak*] (絶対格)
 cf. $*[[\text{ardi=ak}] \text{ eta } [\text{behi=ak}]]$ (絶対格)

格標識は、前述のように直前の語と一体的に発音されるが、名詞・形容詞・限定詞のいずれにも付属することから接語であると考えられ、実際に Dryer (2011) は後接語として数えている。(10) から分かるように接語の付加する要素であることは等位接続の妨げにはならない。す

⁷ 固有名詞は普通単独で NP として振る舞うが、等位接続の場合 (13b) の構造をとることが可能な方言がある (GB: 862)。レクンベリ方言では不可能である。

ると、なぜ (13b) は許されないのだろうか。

少なくとも二つ可能性がある。一つは、実は格標識が (11) と同じく接辞であるということである。しかし、名詞・形容詞・限定詞が同一の語類に属し、しかも名詞句の主要部であるという独立の証拠は見つからないため、この理由は採用しがたい。

もう一つは、格が NP において義務的な要素であるゆえに、無標識の NP と有標の NP を接続すると格のミスマッチが起こるため、というものである。無標識の NP は「格の指定されていない NP」とは解釈されず、「絶対格の NP」という読みしか持たないため、他の格の標示がある NP と接続されると非文法的になるのである。

4. まとめ

ゼロとは標識が無いことによって何らかの意味機能が表現されていることだと考えると、バスク語の無標識名詞句は、ゼロで表される絶対格を持つと言える。レクンベリ方言の場合、機能の面からは絶対格の独自性を決定できないが、等位接続を見ると名詞句は格を義務的に持つと考えられ、それゆえ無標識名詞句に絶対格を認めることができる。

略号一覧

1P: 一人称複数、1S: 一人称単数、3P: 三人称複数、3S: 三人称単数、A: 絶対格項の一致、ABS: 絶対格、ALL: 向格、DAT: 与格、E: 能格項の一致、ERG: 能格、FUT: 未来分詞、IPFV: 未完了分詞、PFV: 完了分詞、PL: 複数、PRS: 現在時制、SG: 単数、-: 接辞境界、=: 接語境界

参考文献

- Adger, David (2003) *Core syntax: a minimalist approach*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert (2007) *The grammar of words: an introduction to morphology*. 2nd edn. Oxford: Oxford University Press.
- (2010) *Construction morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blake, Barry J. (2001) *Case*. 2nd edn. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan (1985) *Morphology: a study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- (2010) *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, David (2011) *A dictionary of linguistics and phonetics*. 6th edn. Malden: Blackwell Publishing.
- Dixon, R. M. W. (2009) Zero and nothing in Jarawara. In: J. Helmbrecht *et al.* (eds.) *Form and function in language research: Papers in honour of Christian Lehmann*, 125-138. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Dryer, Matthew S. (2011) Position of Case Affixes. In: Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Munich: Max Planck Digital Library, chapter 51. <http://wals.info/chapter/51>. Accessed on 2012-04-17.

- GB = José Ignacio Hualde & Jon Ortiz de Urbina (eds.) (2003) *A grammar of Basque*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Gleason, H. A., Jr. (1961) *An introduction to descriptive linguistics*. Rev. edn. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典』第6巻：術語編，東京：三省堂.
- Matthews, P. H. (1974) *Morphology: an introduction to the theory of word-structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rijk, Rudolf P. G. de (2008) *Standard Basque: a progressive grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 佐久間淳一・加藤重広・町田健 (2004) 『言語学入門』東京：研究社.
- Trask, R. L. (1992) *A dictionary of grammatical terms in linguistics*. London: Routledge.
- Zuazo, Koldo (2008) *Euskalkiak: euskararen dialektoak*. Donostia: Elkar.

The absolutive case marked by zero in the Lecumberry dialect of Basque

ISHIZUKA Masayuki

Keywords: Basque, Lecumberry dialect, noun phrase, coordination, absolutive case, zero

Abstract

While the Basque language has several markers indicating the case of a noun phrase (NP), a non-marked NP can be used with a particular function. I maintain that the non-marked NPs have a case, i.e. so-called absolutive, and that the case is signified by zero. Zero can be found to exist only in grammatical categories that are obligatory. In the Lecumberry dialect, the function of non-marked NPs overlaps with that of ergative NPs, and it is hard to determine whether the non-marked NPs have their own function. But observing the coordination of NPs, one can see that NPs without case cannot be coordinated. This fact indicates that a NP must have a case, i.e. the case is an obligatory category. Thus, the non-marked NPs have the absolutive case marked by zero.

(いしづか・まさゆき)